厚生労働省科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））
総括研究報告書

F-SOAIP を用いた特別な支援の必要な保護者対応の記録システム

研究代表者　上田敏丈
名古屋市立大学　大学院人間文化研究科　教授

研究要旨

本研究は、保育所において、特別な支援や配慮の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、①どのような支援プロセスによって適切な子育て環境構築が可能となったのか、②保育所内での他保育士及び他職種間と保護者に関する情報共有のツール開発、③ ①②の知見を踏まえて、F-SOAIP による保護者対応の記録の蓄積と活用の実態調査という目的を検討する。研究全体の目的と年度の計画は図 1 の通りである。

令和 3（2021）年度では、①保育士と保護者との子育て支援関係の先行研究のレビューを行い、②保育士がどのような支援を行うことで、適切な子育て環境構築が可能となったか、そのプロセスをインタビュー調査から明らかにするとともに、③保護者側が感じる園への相談内容やしやすさ、不安などをアンケート調査から明らかにした。また、④F-SOAIP を保育の記録に用いる際の有用性を検討し、⑤F-SOAIP の記録システム（パイロット版）を作成した。

その結果、保育士及び保護者へのアンケート調査から概ね両者の相談については、適切な関係性が構築されており、80%以上の保護者が丁寧な対応に満足していることである。しかしながら、一部のケースについて、相談しにくいことや相談しても問題が解決していなかった。そのために、配慮や支援の必要な保護者への支援プロセスとして、初期・中期・後期という 3 期によって、異なる対応が必要となることが示唆された。今後、園内での情報共有が必要である。アンケート調査から、このような事例に対しても、記録をとっていなかったり、とっていても、充分に活用していないことが明らかになった。従って、検索・活用のできる記録システムが求められるだろう。

本研究ではそのために、記録のポイントを押さえることのできる F-SOAIP に基づく記録システムを開発した。これらの記録システムを活用し効果検証すること、及び、本年度の成果から、このシステムに、外部専門機関との連携及び活用ができる枠組みを組み入れていくことが今後の課題となる。

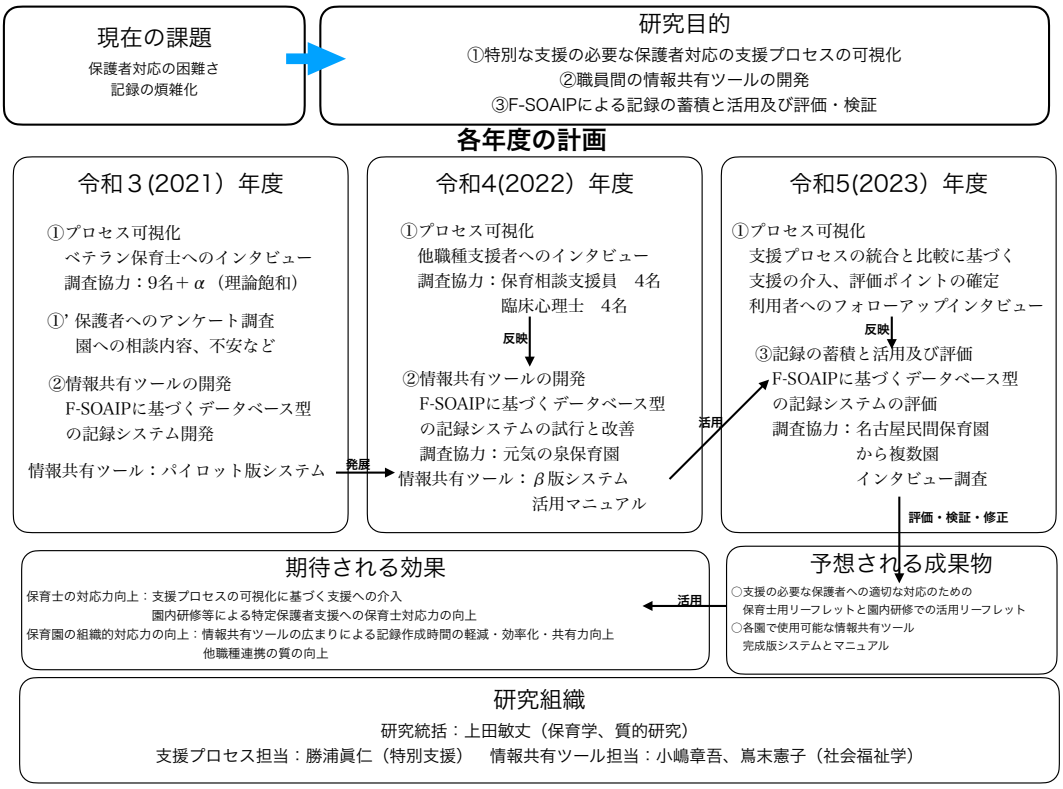

図１　本研究の調査概要と年度の計画

研究分担者
桜花学園大学　保育学部
准教授　勝浦眞仁
国際医療福祉大学　医療福祉学部
教授　小嶋章吾
埼玉県立大学　保健医療福祉学部
准教授　嶌末憲子

研究協力者
大倉山元気の泉保育園
園長　中村聖子

A.研究目的

本研究は、保育所において、特に配慮や支援の必要な保護者への対応を保育士が行う上で、どのような支援体制の構築が可能となるのかを明らかにすることが目的である。

保護者への支援について、保育士の役割が大きなことはこれまでも重要視されてきたが、一方でそれに対する保育士の困難感については、これまでの先行研究においても報告されてきた。例えば、保育者が保護者支援で感じる困難を「保護者自身に起因する困難感」「保育者自身に起因する困難感」「関係性に起因する困難感」があることを明らかにされている（岸本・武藤 2019）。保護者にどのように接すればよいのか、どうすれば過不足なく支援できるのかということは保育士の大きな関心事項であり、関連する書籍も多数出版されている（例えば、西館・徳田 2014 など）。そして、このような困難さが保育士としての離職につながっていることも想定されよう。

従って、配慮や支援の必要な保護者に対して、どのように保育士が対応し、支援プロ

セスを構築しているのか、また課題はどこにあり、どのような組織的体制の構築が可能であるのかを明らかにすることが喫緊の課題である。

そのために、特に本年度は、次の具体的な課題を明らかにする。

⑴ 保護者支援に対して保育士の抱える困難感はどのようなものがあるのかを文献研究から明らかにする（分担報告 1、資料 1）。

⑵保育士の行う保護者支援プロセスをアンケート及びインタビュー調査から明らかにする（分担報告 2）。また、保護者の視点から保育所や保育士への相談についての調査を行う（分担報告 3）。

⑶配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール（パイロット版）を作成する（分担報告 4、資料 2）。

B.研究方法

本研究を行うにあたり、インタビュー・アンケート調査については、研究者間で項目の精選・確認を行い、筆頭著者の所属する大学において、倫理審査委員会の承認を得ている。また、実際に調査を行う際には、牌畏怖先の所属機関との事前協議の上、内諾を頂き、拒否・無回答しても何の不利益もないことを確認した上で、依頼を行った。インタビュー調査については、事前に研究内容の説明を行い、書面にて同意を得た。

個別の研究協力者の概要については、分担報告書等に記載されている。

C.研究結果

⑴保護者支援に対する保育士の抱える困難感に関する文献レビュー

保護者支援における保育士の困難感を文献研究から理論的に探究する基礎的研究として、保育士と保護者との関係性の変容という観点から、保育士の困難感のフェーズを明らかにしていくことを目指した。その結果、関係構築期には、「保護者および保育士の特徴・性格に起因する躓き」および「保育士が保護者に子どもの姿を伝達することに伴う難しさ」、関係葛藤期には、「保育および子どもに関する相互理解がすれ違ってしまうことによる困難感」および「子どもの最善の利益と保護者の意思尊重との板挟みによる困難感」、関係困難期には、「保護者からの信頼感が失われてしまった状況」という３つのフェーズにおける保育士の困難感の仮説モデルを提唱した。各フェーズにおいて活きる保育士の専門性として、「コミュニケーション」、「相互理解」と「子どもの最善の利益」「ソーシャルワーク」をそれぞれ挙げたが、十分に発揮できていない状況がありうることを述べた。また、保護者との関係性によらないものの、「保育システム」および「社会背景」という保育士の困難感を生じさせる要因についても指摘した。

⑵保育士の行う保護者支援プロセス

本調査では、保育士へのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、配慮の必要な保護者への支援プロセスを可視化することで、支援に必要な特徴を明確にすることが目的であった。

アンケート調査からは、

1)保護者の養育態度に課題がある場合と、保護者との何らかのやりとりの中で、保育士の対応や伝え方に問題があること

2)それが原因となり、保護者とのこじれた

関係性が長期化し話し合い回数も増えること
3)関係性が解決にいたるには長期に渡ること解決したと感じた場合でも時間の経過による消極的な解決の場合が多く、解決に至らないことも２割程度あること
　という３点が明らかとなり、それらを踏まえたインタビュー調査からは、保護者と保育士の齟齬が認識のずれを生み出し、それが長期化するプロセスが明らかになった。

　以上のことから、以下の示唆が得られた。
　第一に、保育士と保護者との齟齬が生じた場合の最初の対応を丁寧に行うことが必要である。
　第二に、長期化に至ると、肯定的な関係構築に基づく解決もあるが、そうではない消極的な関係構築に基づく解決や未解決となることも約 20%程度ある。これらの事例は少数となるが、これが保育士へのストレスを高め退職に向かわせることとなるため、組織的な対応や外部との連携による支援が必要である。

　また、保護者に対するアンケート調査から、保護者の保育士への相談については、おおむね保育所や保育士が適切に対応しており、80%以上が相談しやすく、その問題が解決されている、と感じていることが明らかになった。しかしながら、相談しにくいと感じたり、相談した内容が解消されていないと感じている人が、1－2 割いることから、これらの層に対して、適切に対応していくことが肝要であろう。

⑶配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール（パイロット版）の作成
　本研究は、配慮や支援の必要な保護者の情報を共有するツール（パイロット版）を作成することである。
　そのために、
1)F-SOAIP を保育記録へ援用し有用性を検討すること（詳細は別紙資料）
2)具体的菜データベースの構築すること
という２点を行った。

1)保育記録への有用性の検討
　本研究により、保育の記録に F-SOAIP を援用する有用性として、①項目による書きやすさ・教えやすさ, ②実践の変化につながる「保育の循環的な過程」の意識化保育の循環的な過程のやりやすさ，③意図や願いを共有するという記録の意義の再認識の 3 点が明らかになった。

2)F-SOAIP を用いた記録システムの作成
　F-SOAIP に基づく記録システムの開発を行った。
　研究目的 1)から F-SOAIP の概念を保育記録に援用することで有用性が明らかになった。また、1)で得られた知見から、2)の F-SOAIP に基づく記録システムの開発を行うことができた。
　今後、データを入力し、それぞれの園で活用した事例を元に、より効果的なシステム（β版）としたい。

D.考察

本年度の調査から、配慮や支援の必要な保護者への保護者支援について次のことが明らかになった。

保育士及び保護者へのアンケート調査から概ね両者の相談については、適切な関係性が構築されており、80%以上の保護者が丁寧な対応に満足していることである。しかしながら、一部のケースについて、相談しにくいことや相談しても問題が解決していないことがある。

このような時、特に初期段階での対応や伝え方で認識のずれが生じたとき、保育士が支援の困難さを感じる事例が生じることとなった。保育士が支援に困難さを感じる事例では、長期化・複雑化してしまうことがあり、そのような場合、保育士への負担感が高く、離職を意識することへとつながってしまう。また、このような事例は、肯定的な関係性に基づき解決されないことも多く、時間経過による消極的解決や未解決感が残ることも、保育士にとって自己充実感を妨げることとなる。

そのために、配慮や支援の必要な保護者への支援プロセスとして、初期・中期・後期という 3 期によって、異なる対応が必要となることが示唆された。

認識のずれが生じる初期段階においては、まずずれを生じさせないような適切な対応が求められ、生じた場合も、丁寧な対応により保護者関係を構築することが大事である。

認識のずれが生じたまま、長期化していくことが見込まれる際には、組織的な対応として、情報を共有しつつ、一元化した対応が求められる。

長期化・複雑化した場合は、各種専門機関との連携が求められる。特に高ストレス化にさらされる対応保育士にとっては、他者からの支援アドバイスが必要であろう。

そのためには、まず園内での情報共有が必要である。アンケート調査から、このような事例に対しても、記録をとっていなかったり、とっていても、充分に活用していないことが明らかになった。従って、検索・活用のできる記録システムが求められるだろう。

E.結論

本研究ではそのために、記録のポイントを押さえることのできる F-SOAIP に基づく記録システムを開発した。これらの記録システムを活用し効果検証すること、及び、本年度の成果から、このシステムに、外部専門機関との連携及び活用ができる枠組みを組み入れていくことが今後の課題となる。

引用文献

岸本美紀・武藤久枝（2019）保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造―先行研究の分析結果から―. 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要 52, 39–46.

西館有沙・徳田克己（2014）配慮の必要な保護者への支援. Gakken.

F.健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1. 論文発表

勝浦 眞仁・上田 敏丈（2021）. 保護者支援における保育士の抱える困難感のフェーズを探る-保育士による保護者支援のための文献研究. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 24, 35-50. Retrieved from https://cir.nii.ac.jp/crid/1050573243253766144.

中村 聖子・上田 敏丈（2021）. 保育の記録における F–SOAIP 援用の有用性の検討. 質的心理学研究, 20(Special), S22-S28. https://doi.org/10.24525/jaqp.20.Special_S22.

2. 学会発表

なし

H.知的財産権の出願・登録状況

該当なし